
ものをイメージできることの重要性

— 一級建築士 —

1. はじめに～受験の動機・経緯～

一級建築士の取得を意識するようになったのは社会人になってからです。業務に関する分野で何か国家資格を取得したいと思ったのがきっかけです。

初受験は平成14年でした。当時はまだ、学科4科目（計画・法規・構造・施工）、製図試験は5時間30分の旧制度時代でした。その後、生活環境が変わり5年間受験から離れたのち、ようやく平成29年に合格しました。合格に至るまでに実践したことや考えたことについて、いくつか紹介させていただきます。これから受験を考えられる皆様、そして、今まさに受験中の皆様にとって参考になることがあれば幸いです。

2. 学科試験における傾向と対策

学科試験は、計画・環境・法規・構造・施工の5科目で、各科目、概ね20問から30問の4者択一マークシート式で出題されます。広範多岐にわたる出題で、各科目ごとに最低点が設定されています。

得意分野と不得意分野がはっきりしていた私にとって、学科試験は「足切り」との闘いでした。当時なじみのなかった計画、環境、施工のいずれかで最低点に到達できず不合格を繰り返しました。

私が行った対策は、過去7年分の試験問題が掲載された過去問題集で、解答の解説がイラスト付きで充実しているものを買って、受験まで3回ほど繰り返し解きました。

受験する年の4月に問題集を購入し、必ず苦手な科目から勉強を始めました。私の場合は、計画、環境、施工から勉強を始めました。

解答の解説のうち、特に図やイラストがついているものは、何回かノートに書き写して覚えるようにしました。また、解答の解説を読んでもピンとこないものは、ネットを援用したり、職場の先輩に聞いたり、職場にある建築関係の仕様書を見るなどして、完璧に理解できなくとも概要がイメージできるようにしました。例えば、計画で出題される施設整備事例から誤りを選択する問題で、「〇〇団地は、〇〇を解消するために建替えられた低層住宅群である」という問題の場合、「〇〇団地」が本当に低層住宅群であるかどうか、をネットで画像検索して調べるなどです。

3. 製図試験における傾向と対策

約3,000平米の敷地が与えられ、午前11時から午後5時半までの6時間半の間で基本計画を練り、A2サイズ用の紙1枚とA3サイズの用紙1枚に提案書をまとめて提出する試験です。

出題される建築物は、単一用途ではなく、複数の用途を1つの施設に複合化させることが求められ、各用途を適切にゾーニングすること、利用者が迷わないこと、管理者が適切に管理できることが製図試験ではキーポイントになっているようです。このポイントを外してしまうと、他ができていても不合格になる恐れが高く、逆に、キーポイントを外していなければ、他が少々できていなくても合格の可能性が高くなるよう、経験上思います。

試験対策ですが、1年間だけ資格学校へ通いました。製図試験では、特に作図時間との闘いになります。私は、概ね3時間で仕上げるよう練習をしていましたが、道具を持ち替えるのにどうしても時間がかかり、練習段階では3時間の壁を破ることができませんでした。この状況を打開すべく、資格学校側からの指導もあり、フリーハンドによる作図に切り替えました。フリーハンドでの作図に切り替えることにより、道具を持ち替える手間が減り、私にとっては安心感につながりました。

エスキスは、沢山問題を解くよりは、典型的な2～3パターンの問題を選んで復習すること、復習するときは、各書室の配置の順番までつぶさに暗記するのではなく、エントランスからロビーを介して各ゾーンへ動線がどう流れていくかを復習すればよいと思います。

私が合格した平成29年の試験では、受験生に「コンセプトルーム」を自由提案させ、図面化と用途・内装しつらえを記述する問題が出題されました。

予想外であり、どう設計しようか戸惑いましたが、たまたまプライベートで訪れた、とある道の駅の直売店の空間のイメージを思い出し、



川西市 都市政策部公共施設マネジメント課
課長

はやし まきのり
林 正紀

(取得した資格：一級建築士)
(資格取得年度：平成29年度)

一か八かで、そのイメージを参考にしながら解答した記憶が残っています。

製図試験も数回受験しましたが、事前の練習問題では予想できない「何か」が必ず問われるのも製図試験の特徴であると思います。

4. おわりに

合格するまでそれなりにエネルギーを投入することになると思います。なかなか結果に結びつかないこともあるかと思いますが、時間がかかっても「自分を信じ続けること」「いつか絶対合格する日が来る」と思い続けることが一番大事かと思っています。時間がかかってしまったなか、励まし続けていただきました職場の皆様へはお詫びと感謝を申し上げます。

また、私の経験として1点だけお伝えしたいのですが、私生活でも色々と建物に触れる機会が多いと思いますが、このときの空間体験を、建築屋として自らの印象に残すことは、職能として非常に大事であると思います。今後、私が建築士として業務に携わるうえで大事にしていきたいと思っています。